

第6学年 総合的な学習の時間 学習指導案

第6学年 1組 32名 2組 32名
 指導者 吉岡 佐登美 小野瀬 悠里

1 単元名「未来へはばたけ！～小学校卒業研究～」

2 単元の目標

やりがいをもって働く大人たちの仕事や思いを知ることを通して、自分の未来像を創る一助とし、主体的に学んでいこうとする意欲や態度を育てる。

また将来の夢を現実的に見つめ直し、実現に向けて必要なことを探究的に調べて発表する活動を通して、夢を実現するために必要なキャリア※の基礎を養う。

※キャリア（概念）…人が生涯の中で様々な役割を果たす過程で、自らの役割の価値や自分と役割との関係を見出していく連なりや積み重ね

3 評価規準

問題解決的な学習で育てたい力 (ESDで育てたい力)	学習過程	重視する能力と態度
問題を見出す力 〔批判的に思考判断する力 コミュニケーションを行う力〕	学びに 火をつける	自分の将来の夢について見つめ直し、具体的な道筋、派生する道筋について知る。
計画を立てる力 〔多面的・総合的に考える力〕	調べる	これまでに学習した多くの方法（本、インターネット、インタビュー）を活用し、多面的に調べることができる。
問題を追究する力 〔コミュニケーションを行う力〕		他者（本単元では社会人）の意見を活用し、自分の考えに取り入れることができる。
振り返る力 〔批判的に思考判断する力〕	まとめる	学習ごとのワークシートを振り返り、自分の変容、もしくは変わらない思いに気付くことができる。
分かりやすく表現する力 〔多面的・総合的に考える力〕	伝え合う	八名川まつりの発表を通して、聞きに来る人たちの目線に立った発表方法を工夫することができる。
実生活に活かす力 〔未来像を予測して計画を立てる力 コミュニケーションを行う力〕		自分の将来のこととつなげて考え、未来に向かっての見通しや意欲をもつことができる。
人と関わる力		周囲とのやりとりを通して、自身の価値観を変容させたり、再認識したりすることができる。

4 単元について

(1) 単元観

キャリア教育の実施が急務である。平成23年度の中教審答申によれば「若者の完全失業率は10%」「学校から社会への移行がスムーズに行われていない」という実態が発表されている。10人に1人が職に就いていない（就けていない）という現在、キャリア概念を意識した未来志向の学びが必要とされている。

本単元においては、漠然とした夢ではなく児童が自ら将来つきたい職業について具体的、かつ現実的に調べる。働いている大人の方から、具体的な仕事の内容、職業につくための資格や学歴、職業に就いてから気付いたこと、誇りや自負、現在でも努力していることなどの話を聞くことで、自分の未来に対しての視野を広げたり、思考したりする材料となることをねらいとする。

(2) 児童の実態

本学年は、各種学力調査において正答率が高く、基礎的、基本的な知識・技能は身につけていると捉えられる児童が多い。進路調査においては3分の1程度が私立中学等への受験をするという実態がある。

本単元に関わる将来の夢については、スポーツ選手をはじめとした特定の職業を具体的に挙げる児童が半数いる。一方で「いい大学に入って、いい暮らしをする」といった漠然としたものや「漫画家になりたいけど、まずは公務員になってから漫画を描く」という、児童なりに現実を考えたのであろう回答もあった。まだ夢を描いているだけで、現実的な自分の将来として考えてはいない児童が多いと言える。

(3) 指導観

学習指導要領の総則においては『人間尊重の精神と生命に対する畏敬の念を家庭、学校、その他社会における具体的な生活の中に生かし、豊かな心を持ち、伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛し、個性豊かな文化の創造を図るとともに、公共の精神を尊び、民主的な社会及び国家の発展に努め、他国を尊重し、国際社会の平和と発展や環境の保全に貢献し未来を拓く主体性のある日本人を育成（すること）』が求められている。この実現のために、本単元を指導する上では「自分の今の学びが将来につながっていること」や「自分の行動によって周囲や世界がかわっていくこと」を意識させたい。

前者については、なりたい職業について探究的に調べることを通して意識させたい。自分の学習や、中学を受験することが、どのような意味を持つのかを考えて取り組む児童は少ない。そこで、職業に求められる資質や能力について調べたり話を聞いたりすることで、中学の学習に向けた意欲付けの一助とする。

後者については、働く大人たち取材することを通して意識させたい。本単元の中に企画されている「夢を形に！ジュニアセミナー」というイベントを通して、児童に働く大人たちのやりがい、特に社会への貢献や影響について知らせる。これによって、児童が未来に希望をもち、社会の一員として生きていく自覚を促したい。

5 研究主題に迫るための手立て

(1) 学びに火をつける導入の工夫

①「将来の夢」を学習材とする

「将来の夢」という、今までなんとなくふれてきた程度のを学習材にすることで、児童の学びに火をつける。前提として、興味や関心のあることが将来の夢になっているはずである。これを探究的に調べ直すことを通して、意欲的な学びのスタートダッシュを切る。

②地域人材の活用、その場の設定

火をつけた後の追求段階第1歩として「夢を形に！ジュニアセミナー」を開催する。これは、いわば児童対象の職業説明会である。教員の知人や保護者・地域の方からゲストティーチャーを募集し、その職業についての理由や、仕事のやりがいを話していただく。その職を志さない児童にとっても、大人がどのような気持ちで働いているかを学んだり、考えたりする1つの視点となることを目的としている。

(2) 考えや学びの軌跡がわかるもの

授業1時間1時間にワークシートを用意し、1冊の本にまとめていく。時間ごとに感想を書かせることを通して、自分自身の意識の変化や成長に気付かせたい。

(3)「対話型授業12の要件」との関連

単元としては②、③、④、⑤、⑥、⑦、⑪、⑫を重点的に狙うことができると捉えている。特に自分の将来の夢について考える段階や、ジュニアセミナーの段階では「②多様な他者との対話機会の意図的な設定」「④自己内対話と他者との対話の往還」の活動が深められる。

また単元として12の要件を意識するというより、この単元がよりよい学びとなるよう、12の項目を意識した日常的な活動に取り組んできた。具体的には「①受容的雰囲気醸成」「②多様な他者との対話機会の意図的な設定」としては、俳句の句会がある。句の良さを見付け合うことでお互いの良さを認め合い、句の推敲を通して互いを高めあう意識の共有、批判を恐れず異見を受け入れるという活動を溶け込ませている。